

近代における「天上天下唯我独尊」の説示

西義人（京都女子学園）

本発表は、釈尊が出生の時に発したと伝えられる「天上天下唯我独尊」（誕生偈）の意味が、近代、具体的には明治・大正においてどのように説明されていたのかを、釈尊だけが「独尊」なのではなくあらゆるものが「尊」なのであるとする説示（以下「すべてが尊い」説）に特に注目して考察するものである。

発表者は以前、浄土真宗本願寺派が発刊している入門書や宗門校の教科書などで「天上天下唯我独尊」が「すべてのいのちは尊い」という意味であると説明されている現状について問題提起を行った（「天上天下唯我独尊」をどう説明するか—本願寺派における「いのちは尊い」説の定着に関して—、『龍谷教学』51号、2016年。なお今回は、考察の対象としている説示に「いのちは尊い」という表現がほぼ見られないので、「いのちは尊い」説ではなく「すべてが尊い」説と表現している）。その際は、「唯我独」が「すべて」となるような正反対の説明がなぜ成立するのか、そのような説示の源流はどこにあるのか、そして、入門書や教科書で結論のみを提示するという方法に問題はないのか等の点について、戦後から現代にかけての文献を対象に考察した。これに対して、近代において既に同様の解釈が提示されているとの指摘があった。本発表はその指摘を受け、考察をさらに進めるものである。

近代日本仏教の特徴のひとつは西洋の仏教研究の導入であり、そこでは歴史的人物としての釈迦の「実像」を追求することが重視されていた。そこから考えると、「すべてが尊い」説もまた、生まれた直後の赤ん坊が立って歩いて言葉を発したという出胎の伝承に対する、近代的合理的な解釈の結果出てきたものと想像することはできる。しかし、近代の「すべてが尊い」説の事例には、雲門文偃（864—949）や二宮尊徳（1787—1856）といった近代以前の人物の言葉に基づいているものが散見される。また、少なくとも近世中期には「天上天下唯我独尊」が「独りよがり」の意味で一般的に用いられていたとの指摘がある。そのような用法への反発として、「天上天下唯我独尊」は「独りよがり」ではなく「すべてが尊い」という意味なのだと言主張することが、当時すでに行われていた可能性もあるだろう。いずれにしても、「すべてが尊い」説の萌芽は近代以前にあったと見られるのである。

その一方で、「すべてが尊い」説が、近代に発達したメディア等を通じてそれまでにない規模で拡散し、現代に直接的な影響を与える言説にまで発展したということも十分考えられることである。今回扱うのは百花繚乱ともいえる近代仏教の中のごく限られた事例ではあるが、昨今充実の度が高まっている近代仏教研究の成果に依りながら、時代状況や媒体などの情報を具体的に確認しつつ、それぞれの特徴を考察してゆくこととする。

キーワード：仏伝 灌仏会 情報発信